

## 【優秀賞】

## 吃音ではなく、言葉を聞いて

癸生川 怜花（埼玉県 さいたま市立三室中学校 1年生）

「吃音<sup>きつおん</sup>」という言葉を知っていますか？吃音とは、どもることです。私がこの本を選んだ理由は、私も主人公と同じ吃音者だからです。吃音者は百人に一人いると言われていますが知らない人は大勢います。学校の先生だって知らない人が多いです。知らないから仕方がないのかもしれませんが、そういう人たちによって、私たち吃音者は日々傷つけられています。

吃音には、音を何度も繰り返す「連発」、音を伸ばす「伸発」、最初の音が出ない「難発」などがあります。原因はわからず、治療法はありません。主人公の柏崎悠太は、連発と難発の吃音者です。人と話すのが怖く、人を避け、中学での初めての自己紹介は仮病を使い保健室に行きました。授業で教科書を読む場面では、何も知らない先生は初め、「漢字が読めないのか？」とからかうように言い後になって状況を理解しました。私はこれを読んでいて胸が痛くなりました。同じようなことを経験したことがあったからです。私は連発の吃音で、授業でみんなに説明することになった時、つかえてしまいました。先生は笑いながら「落ち着いて、もう一回言ってごらん。」と言いました。先生に笑われた！その時の私はただが頭の中を駆けめぐり、とても悲しくなりまし

た。吃音を知らない人は、焦っているから、緊張しているから、つかえらると思うようです。

悠太は、今までの逃げ続けてきた自分を変えたいと思い、中学では放送部に入りました。けれど声優志望の女の子にアニメの台本を使つての発声練習をさせられ、吃音を治そうと弁論大会への出場も強いられ、苦しくなります。もう嫌だと逃げ出し、クラスメイトにもバカにされ、消えてしまいたいと思います。私は悠太のように、逃げてはいけません。授業中に手を挙げて発言もするし、人前で話すことも積極的に頑張っています。クラスメイトにバカにされたこともあまりありません。でも、悠太が友達に「それってなんなの？もしかして病気？」と聞かれたように、私も「なんでそんなにつかえるの？」と友達に言われたことがあります。悠太は「病気みたいなものかな。」と答えたけれど、私は答えられませんでした。そんな小さなことと思われるかもしれませんが、その時心に何かがチクリと刺さった感じがしました。

思い通りにしゃべれない時は本当に苦しいです。なぜ自分だけがこんなにつかえるのか、悔しい思いをするのかと思います。話すことが大好きなのに、思い切つて話せない。「自信をもって話せば。」たくさん練習しなきゃ。「失敗したっていいじゃない。」などと、人からわかつたように言われるのも腹が立ちます。普通に話せる人に、吃音者の気持ちが変わるわけがない。放送部の友人や姉から言われた時の悠太の気持ちに私にはよくわかります。何もかも嫌になる時が、これから私にも来るのかなと怖くもなります。

悠太は、放送部の友人が以前吃音者で、悠太の為を思つての練習をしていたこと、姉が演劇部で孤立していたのは、劇中で吃音者のことを笑うシーンがあり反発したからだということを知り、

自分の周りの人々の優しさに気づきません。そして弁論大会に出ることを決意し、自分の思いをみんなに伝えました。私はこの場面が一番心に残っています。弁論大会に出場するのはとても勇気のあることです。失敗しても、傷ついても、助けてくれる人がいるんだから逃げてちゃだめだ、前に進まなくちゃと、一生懸命に話した悠太。何回つかえても、笑われても、嫌な顔をされても、最後まであきらめずに自分の思いを伝えた姿に感動しました。私だったらどうだろう。そんな状況で最後まで自分の思いを伝えられるだろうか。途中でやめてしまうかもしれない。悠太は強いなと思いました。

吃音は自分ではどうすることもできません。医学的には発達障害の一つとされているけれど、日本ではほとんど障害と認められず、あまり知られていません。世の中には「吃音」をもっと知ってほしいです。勉強してほしいです。笑ったり、バカにしたりすることは絶対にしてほしくありません。原因も治療法もわかっていないのに、よく知りもせず、その人の思い込みの考えで練習させたり、自信を持って強い心を持つてはよいのだとか簡単に言うてほしくありません。気にしないふりをしていても、やっぱり傷ついているのです。特別扱いも、同情もしてほしくありません。吃音者であっても、首相やアナウンサー、俳優になった人だっています。私にも悠太のように、いつでも支えてくれる人たちがいます。だから吃音があっても気にせずに、勇気を持ってこれからも色々なことに挑戦していきたいと思えます。

書名…僕は上手にしゃべれない

著者…椎野 直弥